

平成29年度

自己点検・評価書  
(学校評価報告書)

附属特別支援学校

## 1 附属特別支援学校の現況

### (1) 学校名

大阪教育大学附属特別支援学校

### (2) 所在地

大阪市平野区喜連4-8-71

### (3) 学級数・収容定員

3学級（小学部3 15名）中学部（3学年 18名）高等部（3学年 20名）計9学級 53名

### (4) 幼児・児童・生徒数

53名（男子36名 女子17名）

### (5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 27人(うち, 臨時的雇用5人, 育児休業2人), 非常勤講師 3人  
事務職員 3人(専任1人, 事務補佐員1人, 非常勤栄養士1人, 臨時用務員(用務員)1人), 学校カウンセラー2人(非常勤) 臨時用務員(調理師)5人

## 2 附属特別支援学校の特徴

本校は、知的障害のある児童生徒を対象として、一人ひとりの障害や発達の状況に応じた適切な教育を行う。  
1学年1クラス（小学部は2学年で複式学級）の大坂府内で一番小さな知的障害の特別支援学校である。  
創立52年となり、卒業生も478名となり、地域の役に立ち、発信できる学校づくりをめざしている。

## 3 附属特別支援学校の役割

- (1) 大阪教育大学と一体となって、教育の理論と実際に関する研究を行うこと。
- (2) 本学の教育実習機関として、実習生を受け入れ、適切な指導を行うこと。
- (3) 教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てること。
- (4) 特別支援教育について地域に発信し、安全教育などについても取組んでいく。

## 4 附属特別支援学校の学校教育目標

一人ひとりの人格と人権を尊重し、個別的・集団的指導を通じて、次に掲げる具体目標の達成に努め、発達の可能性をより豊かに実現させる。

- 明るく健康で意欲的な子ども
- 仲間とともに活動に参加できる子ども
- 自分で考え行動できると同時に、社会の一員としての自覚を持つ子ども

## 5 附属特別支援学校の学校教育計画

### ○教育方針

- ・一人ひとりの人格と能力を尊重し、集団的あるいは個別的指導を通じて発達の可能性をより豊かに実現させる。

### ○教育目標

- ・自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。
- ・キャリア教育の視点に立って卒業後の社会で生きる力を身につける。

# ○本年度の重点目標

## (1) 子どもにじっくり寄り添う教育の取組み

- ① クラスを円滑に運営し、児童・生徒同士の関係にも配慮した取組み
- ② 学校カウンセラーと教員との共通理解に基づく取組み
- ③ 教育の土台となる教員間の協働意識づくりと学習環境づくり
- ④ 教員間や教員と保護者間の子育てや教育や進路に関する情報共有

## (2) 安心・安全な学校づくり

- ① 事故や災害に臨機に対応できる教職員の意識づくり
- ② 安全・安心な校内環境づくり

## (3) 教育実践と研究の取組み

- ① 科学的根拠に基づいた魅力ある教育実践 (Art & Science) の意識共有
- ② 挑戦的で魅力ある教育の実現
- ③ 適切な支援計画と指導計画にも基づいた教育を行う
- ④ 科学的根拠に基づいた魅力ある教育実践を支えるために大学等と連携した研究活動を推進する
- ⑤ 教員の専門性の向上させるための研究会等の充実をはかる

## (4) 教員志願者の育成

- ① 教育実習に関して大学の実習担当者との交流機会を増やす
- ② 教育実習の指導内容や評価方法の検討
- ③ 若手教員の授業力向上への取り組みを続ける

## (5) インクルーシブ教育への取組み

- ① 地域との連携づくり
- ② 平野五校園共同研究を通じて附属学校間の連携を深める
- ③ 交流及び共同学習の継続と一層の充実をはかる

## (6) キャリア支援

- ① 職場開拓の取組み
- ② 職場体験及び体験実習の中身の充実

## (7) 入学選考に関する検討

- ① 現状を踏まえたうえでの入学試験改革を進め、教育活動の充実をはかる。

## (8) 情報の発信

- ① 学校で行っている活動や授業などを積極的に発信する
- ② 授業や研究などの成果を学会や雑誌等に積極的に発信する

6 附属特別支援学校の平成29年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	一人ひとりの人格と人権を尊重し、個別的・集団的指導を通じて、次に掲げる具体目標の達成に努め、発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○ 明るく健康で意欲的な子ども ○ 仲間とともに活動に参加できる子ども ○ 自分で考え行動できると同時に、社会の一員としての自覚を持つ子ども
学校教育計画	○教育方針 ・一人ひとりの人格と能力を尊重し、集団的あるいは個別的指導を通じて発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○教育目標 ・自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。 ・キャリア教育の視点に立って卒業後の社会で生きる力を身につける。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
1. 子どもにじっくり寄り添う教育の取組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習環境づくり</li> <li>・教員間、教員と保護者間の情報共有</li> <li>・学校カウンセラーとの連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達が落ち着いて学習に臨める環境をつくるために学習グループや教室配置、衝立の使用や教材等にも十分な配慮ができた。</li> <li>・教員間の連絡や保護者との情報交換についてはできる限り詳しく行うことができた。</li> <li>・学校カウンセラーとの連携で子どもや保護者の抱える悩みや思いに思いを寄せることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部を構成する子どもによって状況に応じた配慮や環境を適宜考える。</li> <li>・保護者との連携については、連絡帳や学部たよりを通して日々行っているが、より丁寧にしていかねばいけない。</li> <li>・カウンセラーが替るため、守秘義務や連絡系統を徹底していく必要がある。</li> </ul>	A	教育評価アンケートでは子どもに合った授業づくりや授業内容、教材や配慮があるといった肯定的意見がほとんどで、感謝の言葉が多かった。しかし、一部に、もっと知識獲得に重点を置いた授業を行ってほしいという要望もあった。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室環境・学校施設を整え充実させるために、リサイクル品の活用や教育後援会にも協力を得る。</li> <li>・個別の発達段階や習熟度はかなり異なるが、子どもの力を引き出せる授業や環境を作りたい。</li> <li>・学校カウンセラーと交流する時間を計画的にとる。</li> </ul>

学校教育目標	一人ひとりの人格と人権を尊重し、個別的・集団的指導を通じて、次に掲げる具体目標の達成に努め、発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○ 明るく健康で意欲的な子ども ○ 仲間とともに活動に参加できる子ども ○ 自分で考え行動できると同時に、社会の一員としての自覚を持つ子ども
学校教育計画	○教育方針 ・一人ひとりの人格と能力を尊重し、集団的あるいは個別的指導を通じて発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○教育目標 ・自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。 ・キャリア教育の視点に立って卒業後の社会で生きる力を身につける。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
2. 安心・安全な学校づくり	・災害に臨機に対応できる教職員の意識づくり  ・校内の安心・安全な環境づくり	・訓練当日に役割分担予定通りに行かない状況になったことがあったが、要となる教員が連携して臨機応変に動くことができた。 ・主幹教諭と用務員が校内の様子を常に見て回り、すぐに対応できていた。また教員の意識も未然防止に意識が高くなっている。	・管理職不在時に、安全主任や主幹が指揮を執る訓練も行う。また、津波避難についても日々意識しないといけない。 ・安全意識は高まっているが、経年劣化している箇所も多く危険想定が必要あり。	A	・学校がきれいに保たれていると、保護者よりよくご意見を頂く。また、保護者の協力もあり、花壇がきれいに整備され、危険箇所の発見につながることもあった。	A	・管理職不在の訓練等は当然のことなので、常に今地震が起こったら、不審者がきたら、給食で異物混入があったら等を意識して過ごせる教員集団づくりに努めたい。
3. 教育実践と研究の取組み	・「Art & Science ～科学的根拠に基づいた魅力ある教育実践～」研究実践報告会 ・文科省事業「心のバリアフリー」3校連携を実施し評価指標等で成果をあげる ・大学との連携をこれまで以上にすすめる	・教員自身の人間的魅力を授業に生かし、科学的根拠に基づく分析への意識を高めることができた。 ・主に中学部で公立中学支援学級、平野附属中学と連携し、視覚障害をテーマに取組み活動並びに評価指標提示等成果をあげた ・大学の先生方に環境デザインや情報教育・ICT活用、美術の授業づくり等連携することができた。	・年間を通じて、研究会で発表・協議を繰り返した。もう少し、普段の授業を見合う環境づくりが必要である。 ・中学部の教員が中心であったので、他学部においても交流から共同学習の視点を高めていかねばならない。 ・大学の先生方に通常の授業での指導助言を仰いでいく。	A	・教育評価アンケートの結果から、学部PTAや研究部たより等を通して、研究活動内容が授業づくりや個々の発達に役立っていることをご理解いただいた。 ・特別支援教育講座の先生方と連携をとり、来て頂けるように取組む。	A	・教員が子ども達の発達を促す授業づくりに取組むとともに、授業予定を送ったり、毎月実施している研究会にも来校依頼をして、普段から連携し、指導を仰ぐことができる環境を作っていく。

学校教育目標	一人ひとりの人格と人権を尊重し、個別的・集団的指導を通じて、次に掲げる具体目標の達成に努め、発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○ 明るく健康で意欲的な子ども ○ 仲間とともに活動に参加できる子ども ○ 自分で考え行動できると同時に、社会の一員としての自覚を持つ子ども
学校教育計画	○教育方針 ・一人ひとりの人格と能力を尊重し、集団的あるいは個別的指導を通じて発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○教育目標 ・自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。 ・キャリア教育の視点に立って卒業後の社会で生きる力を身につける。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
4. 教員志望者の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学との連携による充実した教育実習</li> <li>教育実習の質的向上を通じた教職課程の質的水準の向上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学の事前指導を受けて教育実習にくるので、大学との連携を取りやすくなった。ただ、2期にわたる教育実習の実施で、教員は疲弊した。より充実したものにするために、検討課題はある。</li> <li>個別の教育支援計画については学生に見せることはないが、子ども一人ひとりが持っている課題や支援のポイントなど、教員との打合せなどに活用することができ、短時間で話を進め、実際の支援や学習内容について検討する時間が増えた。</li> <li>教員との打ち合わせ時間の確保をすることで、退勤時間を守り、健康的に期間を過ごせるようになっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育実習が3週間2期になり、10月～12月に子どもにじっくり寄り添う期間に、重心が子どもに対してより、学生に対する指導を考えないといけない状況になっている。教育実習は1期のみにして、改善を計りたい。</li> <li>学生が本校に来る際に、「教員になるために」という意識をしっかりと高めてきてもらうことが一番である。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生のアンケートより、退勤時間を18時と設定していることが学生にとっては集中して取り組めるようである。一部にもっと残って学校で教材準備をしたいと言う要望があった。</li> <li>五校園連携型教育実習をおこなったが、他校園にいけることが平野地区の良さでもあるので、よい学びになったという意見が多かった。</li> <li>支援を要する学生も多く、大学教授からも丁寧な指導をして頂いているという言葉頂くことが多かった。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度は教育実習が3週間、そして2期にわたって行われたが、やはり本校の児童生徒への指導を考えると、1期に戻して頂く事が必須である。</li> <li>HATOプロジェクトの教育実習生に向けた教材を活用するなど、効果的に始動する手段を身に付けなくてはいけない。</li> <li>学習指導要領も変わることから、指導案の記入の仕方も少し変更が起こる。学生指導とあわせて考えていければよいと考える。</li> </ul>

学校教育目標	一人ひとりの人格と人権を尊重し、個別的・集団的指導を通じて、次に掲げる具体目標の達成に努め、発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○ 明るく健康で意欲的な子ども ○ 仲間とともに活動に参加できる子ども ○ 自分で考え行動できると同時に、社会の一員としての自覚を持つ子ども
学校教育計画	○教育方針 ・一人ひとりの人格と能力を尊重し、集団的あるいは個別的指導を通じて発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○教育目標 ・自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。 ・キャリア教育の視点に立って卒業後の社会で生きる力を身につける。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
5. インクルーシブ教育への取組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域との連携づくり</li> <li>・平野五校園共同研究</li> <li>・交流及び共同学習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーディネーターによる地域支援を行っている。またつくしんぼ教室で地域の就学前幼児への支援も行っている。11 附属学校園への支援も行っている。</li> <li>・平野五校園では今年度は五校園の取組みを知り合う 2 年目であった。ボトムアップの研究に取組み、次年度からの共同研究について議論を重ねた。</li> <li>・交流及び共同学習については中学部は「心のバリアフリー」として附属平野中学校、公立中学校支援学級と視覚支援をテーマに取組んだ。小学部と附属池田小学校及び附属平野小学校との交流を行った。高等部は附属幼稚園、そして本学学生と交流をした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年の反省を受けて、コーディネーター部員の年度最初に時間割の調整をしたため、比較的スムーズに機能した。</li> <li>・厳しいスケジュールの中、五校園の研究協議会を 5 回実施し、五校園としての課題を共有し、次年度のテーマを決めることができた。</li> <li>・中学部は文科省採択事業のため、予算も付き講師を招くことができたので充実できた。しかし地域の学校との実情も異なり 3 校の連携となると日程調整が厳しかった。</li> <li>・小学部は平野小学校との連携を継続し、遠方の池田小学校とは今後検討。高等部は幼稚園とは小学校で行う予定。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーディネーター部の行うアンケート結果から肯定的な意見がほぼすべてをしめた。</li> <li>・平野五校園の共同研究については、五校園だからこそできる研究実践を精査し、早く進んでいくことが期待されている。</li> <li>・交流は単なる楽しいもので終わらせず、互いを高める共同学習でなければいけない。五校園だからこそ育める部分があると思うので、そこをうまくまとめて、発信してほしい。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度も年度当初よりコーディネーターが教育相談や地域支援に取組める時間を確保する。新体制であるので、守秘義務など徹底し、より良い支援としていきたい。</li> <li>・五校園の教員が協力して、無理ない範囲で、研究課題をうまく校内に取り入れ、全国発信できるよう、校内研究の設定に取組む。</li> <li>・文部科学省の委託事業は 1 年間だけだったので、予算が無い中でも、附属学校園の繋がりをしっかり持ち、有意義な交流及び共同学習に取組んでいきたい。</li> </ul>

学校教育目標	一人ひとりの人格と人権を尊重し、個別的・集団的指導を通じて、次に掲げる具体目標の達成に努め、発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○ 明るく健康で意欲的な子ども ○ 仲間とともに活動に参加でき、思いやりのある子ども ○ 自立心をもち、自分で考えて行動する子ども
学校教育計画	○教育方針 ・一人ひとりの人格と能力を尊重し、集団的あるいは個別的指導を通じて発達の可能性をより豊かに実現させる。 ○教育目標 ・自立、社会参加に向けて、一人ひとりの可能性を最大限に引き出す。 ・キャリア教育の視点に立って卒業後の社会で生きる力を身につける。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
6. キャリア支援	・職場開拓の取組み  ・体験実習の充実	・進路支援部長（進路支援主事）が中心となり、学校全教員が夏期休業中に職場開拓に取り組む。  ・体験実習や職場体験の場所を確保することや、本校在籍児童生徒の在住地域に意識して事業所との関係づくりに取り組んでいる。	・職場開拓は進路支援部長が中心となって行っているが、時間の確保が難しい。進路部内の役割分担を明確にする。  ・体験実習としては有意義だが、複数回経験できることがのぞましく、情報共有も行う。	B	・教育評価アンケートでも高い評価をいただいております、充実している。	B	・大阪市以外の進路の情報も含め、さらにきめ細やかな情報提供のためにも出張が多くなるが対応できるように校内体制を整える。  ・職場体験実習等更に開拓し、体験実習の充実を図る。
7. 入学選考に関する検討	・入学試験改革を進める	・本年度は入学希望者説明会を早く2度実施。新1年生の定員は確保したが、小学部の不補充で二次募集を行い、小学部6年が1名決定した。小学部2年と4年は不補充のままである。	・本校の魅力が何かを明確にし、伝えていくことが必要。  ・入学選考希望者説明会だけでなく、願書受付から早めることにした。	B	・選考基準がわかりにくく人に推薦できないという意見があり学部 PTA で説明を実施。その結果在校生の話を聞いた友人の入学希望が複数あった。	B	・一連の日程を早くした。  ・ホームページなどでどんどん学校の魅力などを発信していきたい。
8. 情報の発信	・活動や授業等を積極的に発信する  ・研究成果を積極的に発信する	・保護者には授業参観は年2回のままであるが、適宜見学して頂けるよう声掛けはしている。学部だよりや研究便りを充実させたい。	・前年度がベースになっているが、新しい教員の発想も大切である。  ・ホームページの更なる活用。	C	・ホームページが少し充実してきているが、もっと保護者や地域の方々の意識にたって取り組む。	B	・業務が立て込んでいるが、必要に応じて学部や行事の情報発信が大切である。ホームページも充実させる。



